

《楽曲解説》

解説＝松岡 由起

10/18 第870回オーチャード定期演奏会

オペラシティ
10/9

オーチャード
10/18

サントリー
10/30

ドヴォルザーク (1841-1904) チェロ協奏曲 口短調 作品104

- I. アレグロ (約16分)
- II. アダージョ・マ・ノン・トロポ (約11分)
- III. フィナーレ・アレグロ・モデラート (約13分)

ドヴォルザークは、交響曲第9番『新世界より』、弦楽四重奏曲第12番『アメリカ』などで知られる、チェコの作曲家である。彼は1891年にプラハ音楽院の作曲科教授となり、翌1892年ニューヨーク・ナショナル音楽院から巨額の年俸を提示されて院長の打診をうけ渡米、その後1895年まで同音楽院の院長を務めた。

チェロ協奏曲は1894-1895年、『新世界より』や『アメリカ』と同じく、アメリカ時代に作曲された作品。本作品作曲のきっかけを作ったのは友人のチェロ奏者ハヌシュ・ヴィハンであり、そして本作品の作曲意欲をかきたてたのは、アメリカの作曲家でチェロ奏者のヴィクター・ハーバートである。ドヴォルザークはハーバート作曲のチェロ協奏曲第2番を演奏会で聴き、とりわけオーケストレーションのバランスに強い刺激を受けたという。

また、本作品では、彼の初恋の人であり、妻の姉でもあったヨゼフィーナ・チェ

ルマーコーヴァーとの関わりも重要な意味を持つ。作曲当時、彼女は重い病気にかかっており、それを知ったドヴォルザークは本作品第2楽章に彼女の好きなドヴォルザークの『4つの歌曲』の第1曲「私をひとりにして」の旋律を使用した。しかし、それだけではなく、1895年に彼がボヘミアに帰郷し、その後彼女が亡くなると、彼は主に終楽章の終結部を作り直すことになる。

第1楽章はクラリネットによって重く沈んだ第1主題、ホルンによって柔らかな第2主題が奏されたのち、独奏チェロが即興風に第1主題を展開していく。**第2楽章**はクラリネットの素朴な主題で始まるが、中間部はト短調に転じ厳かな音楽となり、その後先述の歌曲の旋律が独奏チェロによって朗々と歌われる。**第3楽章**はロンド形式で、はじめ独奏チェロが決然と舞曲風のロンド主題を奏で、のちに作り直された曲の終結部では過去への想いを馳せるかのごとく、第1楽章の第1主題および第2楽章の歌曲の旋律が回帰する。

[楽器編成] フルート2 (2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部

譜例 運命の主題



チャイコフスキー (1840-1893) 交響曲第5番 ホ短調 作品64

- I. アンダンテ-アレグロ・コン・アニマ (約16分)
- II. アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクナ・リチェンツァ (約14分)
- III. ワルツ-アレグロ・モデラート (約6分)
- IV. フィナーレ. アンダンテ・マエストーソ - アレグロ・ヴィヴァーチェ (約14分)

チャイコフスキーは、生涯に6つの交響曲を残している(『マンフレッド交響曲』を除く)。交響曲第5番は第4番のおよそ10年後の1888年に作曲された作品である。

1888年頃は、チャイコフスキーが指揮者として初めて外国演奏旅行に出掛けた頃である。そこでチャイコフスキーはブラームスやグリーグ、ドヴォルザークに会ったという。

そして、その演奏旅行を終えて書かれた作品が交響曲第5番である。チャイコフスキーは、1888年3月、弟モデストに「この夏、私は交響曲を書くつもりである」と手紙を書いているが、同年5月には思うように進まなかったのか、この交響曲創作への不満をもらしている。ただその後はどうにかアイデアをひねり出

し、同年6月にスケッチが完成、8月にはオーケストレーションも完了した。

なお、最初期のスケッチには、第1楽章の標題の草案がある。「序奏。運命の前での、あるいは同じことだが、人に計り難い神の摂理の前での完全な服従。アレグロ、I. ×××に対する不満、疑い、不平、非難。II. 信仰の抱擁に身を委ねるべきではないか???もし実現できれば、すばらしい標題だ」(森垣桂一訳、訳文ママ)。しかしながら、このアイディアは採用されなかったため、完成された交響曲のなかでどの程度この標題的なコンセプトが見出せるかは難しいところである。

この交響曲で軸をなしているのは、一般的に「運命の主題」と呼ばれるものである **譜例**。この主題は全楽章に登場し、作品全体を有機的に結びつけている。

第1楽章 ホ短調、序奏付きソナタ形式。序奏でクラリネットが重々しく「運命の主題」を提示する。少しテンポが上がったところからは提示部となり、クラリネットとファゴットがリズムカルな第1主題を奏でる。二長調に転じ、穏やかで歌

うような第2主題がヴァイオリンによって奏されたのち、展開部へと入る。再現部はファゴットで始まり、終結部では第1主題が押し進められ、最後は低音域の楽器群に吸い込まれ、仄暗く閉じられる。

第2楽章 ニ長調、三部形式。低音域の弦楽器から始まり、その弦楽器を背景にホルンが甘美なソロを奏でる。オーボエによる副旋律が導入されると、嬰へ長調へ転じ明朗になるとともに、背景の弦楽器も規則正しい細かな刻みへと変化する。中間部に入ると嬰へ短調となり、クラリネットを皮切りにその悲しい調へは様々な楽器に受け継がれ、トランペットを中心に力強い「運命の主題」に突入する。弦楽器のピチカートが聴こえてくるところからは再び主部である。突如2度目の「運命の主題」がけたたましく響き緊張が走るが、最後は穏やかに瞑想的に閉じられる。

第3楽章 イ長調、ワルツ。冒頭でヴァイオリンが奏でる主旋律はまさしく優雅なワルツを感じさせる。嬰へ短調に転じ、ヴァイオリンが細かで速い動きに切り替わるところからは中間部である。再現部ではその細かで速い動きを背景に、オーボエが主旋律を奏でる。終結部では「運命の主題」がさりげなくクラリ

ネットとファゴットによって顔をのぞかせ、最後はフォルティシモで終わる。

第4楽章 ホ長調、序奏付きソナタ形式。冒頭から弦楽器により「運命の主題」が力強く登場する。付点リズムの動機が徐々に音楽を盛り立てていき、一瞬音楽は落ち着いたと思われるが、次の瞬間スピードが上がり、激しく第1主題が登場する。音楽はめまぐるしく変化していき、ニ長調で木管楽器による流れるような順次下行の第2主題が登場する。その流れのなかで金管楽器により「運命の主題」が華々しく現れる。展開部は野性的に第1・第2主題が展開され、最終的にピアノシモになるが、それは再現部のフォルティシモの力強い音楽によって打ち破られる。音楽が壮大さを増していくなかで、金管楽器による「運命の主題」が鳴り響く。終結部でも「運命の主題」が弦楽器をはじめとして勇壮に奏でられ、最後は勢いにのって途中第1楽章の第1主題をはさみながら、堂々と閉じられる。

[楽器編成] フルート3 (3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部